

異世界に転移したら、

孤高の騎士の専属お世話係に
任命されました。

えっ、俺が聖人って本当ですか？



「おかえりなさい、ユリウスさん」

「こんな美味しい料理、初めて食べた」

ユリウス

アングレット王国の魔法騎士。
人嫌いのはずが、晴翔を拾い、
一緒に住むことを提案する。
家事能力が皆無。

菅野晴翔

ひょんなことから異世界に
転移した不幸体質の日本人。
伝説の聖女の力を持っており、
体液で浄化ができる。
ユリウスの家で住み込みの
家政夫をすることになった。

CHARACTERS



ランベルト・ディアス

王宮筆頭魔術師。

天才だが変わり者。

晴翔を崇拜している。

ジヘル・ジヨーストン

魔法騎士団の隊長職。

ユリウスを敵視

しているようなが……？

ロキユス・オーウェン

ヴォルテルの側近。子爵家出身。

晴翔の身の回りの

相談に乗ってくれる。

ヴォルテル・アングレット

アングレット王国の王太子。

ユリウスの旧友。孤立しがちな

ユリウスを気にかけている。

晴翔の料理が好き。

目次

異世界に転移したら、孤高の騎士の
専属お世話係に任命されました。
えっ、俺が聖人って本当ですか？

番外編 元カレの末路

異世界に転移したら、

孤高の騎士の専属お世話係に
任命されました。

えっ、俺が聖人って本当ですか？

1・異世界転移

「早く家に帰らなきゃ……!」

今日は珍しく定時で帰れると思ったのに、退勤直前でトラブル発生。自分のミスではないのに上司から理不尽に怒られながら、必死にパソコンを叩いた。

——こんなこと、もう何度目だろうか。

健闘むな空しく三時間の残業。

流星りゅうせいに連絡を入れたら、『わかった。じゃあ外で食べるわ』と返事があったものの、実際はどうかわからない。

流星の趣味はスロットだ。

家賃や生活費は入れてくれるけど、残ったお金でスロットを打ち、負けることが多い。それでお金がなくて外食できず、俺が帰ってくるまで待っていることが多かった。

だから俺は早く家に帰って、流星のためにご飯を作らなければならない。頑張って早く仕事を終わらせたものの、きつと今日も大きなため息とともに怒られるのだろう。それを思うと憂鬱ゆううつになるが仕方がない。帰る家は、三年同様しているあのマンションしかないのだから。

流星と出会ったのはお互い大学生の時だった。地元ではゲイであることをずっと隠していたが、大学進学とともに上京し、通うようになったゲイバーで知り合ったのだ。

通う大学は違うが同じ年ですぐに意気投合。よく二人で飲みに行ったり遊びに行ったりして、恋人関係になるまでそう時間はかからなかった。

大学を卒業し社会人になるタイミングで流星から同棲しようと持ちかけられ、俺は頷いた。

高校生の時に両親を事故で亡くし、兄弟もいない俺は天涯孤獨の身。そんな俺にとつて流星の存在はとても大きく、恋人と一緒に生活できることはとても魅力的だった。

同棲期間で苦手だった家事も上手くなり、料理もできるようになった。休みの日には二人でデートに出かけて外食をする。

そんなささやかな日々でも俺には十分だった。——まだ、流星も優しかったから。

焦る気持ちから、普段は通らない道を選ぶ。ホテル街が近く、あまりこの辺りを通らないようにしていたのだが今日は珍しくそちの道を選んだ。

「あれえ？ 帰らなくていいの〜？」

「いいのいいの。外で食べるって言うてあるし、遅くなっても問題ないって」

聞き覚えのある声がして、自然とそちらに顔が向いた。そこにいた人物を見て、ギシリと体が動かなくなる。

「っていうか流星の彼女酷くない？ 同棲してるくせに家事ほとんどしないで遊び歩いてるんでしょ？ そんな彼女に付き合ってる流星マジ優しすぎ！」

「だろ？ 俺だつてたまには本当の癒しが必要なんだつて。だ・か・らあゝ」

流星。隣にいる女の子はそう呼んだ。流星と呼ばれた男は小柄な女の子にギュッと抱き付くと、女の子は嬉しそうな声を上げた。

「やゝん！ しょうがないなあもう。今日はいっぱいしてあげる！」

「やった！ じゃ行こうぜ。好きだよ、梨花」

人の往来が多くある中で、ちゅつと軽くキスをする、二人は腕を絡ませてホテル街へと消えていった。

あれはどう見ても流星だ。毎日見ているあの顔を見間違えるわけがない。

「嘘だろ……」

たぶん、二人が会ったのは今日が初めてじゃない。こんなところで堂々とキスをしていた。きつと今までに何度もこうして会っている。

金がなかったのはスロットじゃない。あの子と浮気をしていたからだっただんだ。

ドッドドッドと早鐘を打つ心臓が苦しい。手が震える。

俺が家事をしなくて遊び歩いてる？ 冗談じゃない。仕事でどんなに疲れていても、家のことは手を抜かなかつた。なにもしていないのは流星の方じゃないか。

流星が先に帰ってきてても、動画を見ているかゲームをしているだけ。帰りが遅いと文句を言つてご飯を催促するだけ。食べたらずまんまで洗うこともしない。掃除も洗濯も何一つしないくせに文句だけは一丁前。それでも。それでもつ――

「くそっ……！」

悔しくてあふれる涙を無視して、流星とは逆方向へと走り出した。

流星はバイだ。付き合う時もそれが不安だった。いつか可愛い彼女ができて俺は捨てられるんじゃないかって。でも流星は「お前が一番だよ」って言うてくれて、俺はその言葉を信じた。信じてしまった。

俺は流星のことが好きで、流星がいてくれるならって頑張ってたのに。どんなに冷たくされても、俺が頑張ればまた優しく笑ってくれるって思っていたのに。

別れた方がいいかもしれない。

そう思ったのは一度や二度じゃない。でも、できなかった。

ゲイであることを隠し続け、そんな俺に初めてできた恋人。そんな流星を失ったらと思うと恐怖が先に立ったのだ。

依存している。そんなこと、自分でよくわかってる。それでも別れられなかった。優しい流星を知っていたから――

がむしやらに走りながらも頬ほほをつたう涙は止まらない。運動不足がたたったのか、途中で足がもつれて派手に転んでしまう。アスファルトに打ち付けられた体は痛いし、周りからの視線も痛い。でも今の俺にはどうでもよかった。

ぐっと腕に力を入れて起き上がった走り出す。とにかく遠くへ逃げてしまいたかった。

そんな中、コンビ二の灯りあかを目にする。ぐいっと目元を乱暴に拭うとその灯りの中へ飛び込んだ。

籠を手に持ち、手あたり次第ビールや缶チューハイを突っ込んだ。それをレジに持っていくと驚いた店員と目が合った。

店員は訳ありな男をさつさと店から追い出したいのか、手早く精算させようと次々とバーコードを読み取っていく。たくさんの酒は袋に詰められ、それを勢いよく掴むと駆け足でコンビニを後にした。

街灯がうつすらと灯る公園を見つcker。そのまま公園の中に入りベンチへと腰かけた。

はあはあと息は上がり、額からは汗が流れ落ちる。それを構うことなく袋の中から缶ビールを手にとると、ふしゅつと勢いよく開けた。ぐびぐびと喉を鳴らしながら一気に流し込む。火照った体に冷たいビールが心地よかった。

「ぐっ……ごほつごほつ」

だが勢いよく飲みすぎたせいで、むせてしまった。それでも反省することなく再び口を付け、勢いよくビールを流し込んで一缶飲みきった。

「ううっ……なんでっ……！　なんでなんだよ！」

ぼろぼろとみっともなく涙を流しながらも、悲しみと怒りが混じった声を上げ、また新たなビールを手にとった。

どれほどそんなことを繰り返していたのだろう。足元には空いた缶がいくつも転がり、袋の中は残り少なくなっている。酔いが回り、頭がふわふわとしていた。それでも、さつき見たあの光景はくつきりと頭の中に流れている。

情けない。今まで必死にやってきたのは一体なんのためだったのか。好きだったのは俺だけで、流星は俺を都合よく使うだけだった。早々に別れてしまえばよかったのに、そんな流星にしがみついて傷ついて。

「馬鹿だろっ……俺っ！」

ぐっと力をこめると手にしたアルミ缶は歪んだ。中身の酒が零れたがどうでもいい。歪な姿に変わってしまったそれに口を付け、また勢いよく流し込んだ。

「げほっ……ごほっ」

飲み干すことはできず口から盛大に零れてしまった。スーツもシャツもびしゃびしゃだ。濡れた手から缶は滑り落ち、地面に落ちて砂まみれになってしまった。

どうでもいい。なにもかもどうでもいい。

膝に肘をついて両手で顔を覆った。いまだ止まらない涙と嗚咽を繰り返し、みつともなく泣き続けた。

「うっ……うぐっ……」

夜遅くに泣き喚けば近所迷惑になる。酔っ払った頭でもそんなことを考えてしまう自分が嫌だった。どうでもいいか思いながら、こんな時ですら自分勝手に振る舞えない。どこかで冷静に考える自分がいた。

大量に酒を飲んだことで頭がぐわんぐわんと揺れている。前後不覚になっていたせいで、俺はベンチから落ちてしまった。

一瞬、ぐにやりと気持ち悪い感覚がした。酔いが回ったせいだろう。

力の入らない腕でなんとか体を起こした。

顔を上げると、目の前に広がっていたのは、見覚えのない景色。

「は……？ どこだ、ここ……？」

ぼーっと酔った頭で考えるも全然わからない。俺は確か、公園で飲んだくれていたはず……だがここはどこかの路地裏のようだった。

「……はは。どうでもいいや」

考えることを放棄して、俺は地面に寝転んだ。空には星が驚くほど綺麗に瞬^{またた}いている。

こんな星空を見たのはいつぶりだっけ。そう思いながら、強い眠気に襲われた。このまま寝てしまおう、とまぶたを閉じたその時。

「……おい。こんなところでなにをやっている？」

誰かに声をかけられた。思わず目を開ける。

「こんなところで寝るな。殺されるぞ。とつとと起きろ」

男は呆^{あき}れた声色ながら、俺を心配しているようだ。

徐々に近付いてくる足音とともに、暗がりで見えなかった男の姿も見えるようになった。

「こんな路地で寝るなんてなにをやっている。ほら起きろ……っってお前、その髪に目の色……」
男に腕を掴まれ、力強く引き上げられる。ぐつと近くなった男の顔は、目が覚めるような端正な

顔つきの外国人だった。

「うわあ……イケメンだあ。それに日本語お上手ですねえ」

こんな流暢^{うやうやう}に日本語が話せるなんてすごい。しかも顔もよくて、パツと見ただけでもわかるガタイのよさ。多くの人が理想とする姿だろう。

「あ、そうだ。いいこと思いついた！」

流星だつて浮気してたんだ。俺だつて浮気しても文句は言われないはずだ。それにこんなイケメンに抱いてもらえたら最高じゃないか。

「イケメンなお兄さん。えっとね、俺のこと、抱いてくれない？」

「は？」

イケメンさんは俺の酒臭さにぐつと眉間に皺を寄せた。そんな顔も格好いいなあ。贅^{ぜい}沢^{たく}な浮気相手だ。

「一体どれほどの酒を飲んだんだ……」

「んー……？ わかんない。とりあえずたくさん飲んだよぉえへ。俺、何度も経験あるからさあ、だいじょぶだいじょぶ。じゃ手始めにちゅーしよっか」

「は？ ちょ、んんっ!？」

ぐいつと身を寄せ、イケメンさんの唇に吸い付く。唇を合わせるだけのつもりだったのに、勢い余つてちよつと舌まで入れてしまったけど、まあいいか。

「えへへーちゅーしちやったあ」

「な……？」

俺がちゅーしたら、目の前のイケメンさんはすごく驚いた顔をしていた。それだけ顔がよければこんなちゅーくらい何度だって経験あるだろうに。

って初対面の男にいきなりこんなことされたら誰でも驚くか。ははっ、イケメンはどんな顔してもイケメンなんてすごいな。羨ましー。

「痛みが……おい、お前名前は？」

「んー？ 晴翔はると。菅野晴翔すがのでえす！ よろしくねえゝあはは」

「ハルト……？ 変わった名前だな。ハルト、もう一度口付けてもいいか？」

「んー？ もつちろん！ いっぱいちゅーしよー！ って、んんっ、んちゅっ……」

俺がいいよって言った途端、まるで食べられそうな勢いでキスをされた。すぐに舌が入り込み、口の中を暴れ回る。流星とは全然違うキスに、俺も必死になって舌を絡めた。

後頭部をがつつり掴まれて頭を動かせない。こんな熱烈なキスをされるなんて、どれぐらいぶりだろう。気持ちよくて最高じゃないか。

そんなうっとりするキスのせいか、再度強い眠気がやってくる。気持ちよさに抗えず、俺の意識はふっと落ちた。

「んっ……ふうっ……」

なにか不思議な感覚によって目が覚める。

ぴちゃぴちゃという音に、下半身の違和感。その正体が気になり目を開いた。

「……え？　は？」

「なんだ、起きたのか」

なぜか俺の下半身は裸で、しかもさつき会ったイケメンさんに俺のアソコをしゃぶられている。なにがどうしてこうなった!?

「ひゃっ！　ちよっ、んんっ……!」

イケメンさんは俺が起きたことに気が付いてもフェラをやめようとはせず、むしろ勢いを増していた。あまりの気持ちよさに体が跳ねる。

突然のことに混乱するも、与えられる快感が強くて体に力が入る。驚くほど見目のいい男が、俺の陰茎をしゃぶっているこの状況に戸惑いを隠せなかった。

やめさせなければと思うものの、酒が抜けきっていない体では抵抗なんてできなかった。人からここまで快感を与えられたことが久しぶりで、それが嬉しくて、体はもつと欲しいと感じている。「いつでもイッていいぞ」

「やっ……しゃべらっ、ないでっ……」

熱い吐息の当たる感覚に、腰がぞわりと震える。そういえばフェラってこんな感覚だったな。

流星からは愛撫らしい愛撫もなく、ただ性欲を発散させるための都合のいいセックスばかりだった。こんな風に喘ぐほど、快感を与えられたのは久しぶりだ。

イケメンさんは決して乱暴にはしない。ただひたすら俺に気持ちよさだけを与えてくれる。

どうして今、こんなとんでもない状況になっているのかわからないが、誰かにこうして気持ちよくされることが嬉しいと思った。

「あつ、あつ……！ ダメッ……もう、出るっ……！」

「いいぞ。出してしまえ」

「ん、ふっ……んん——ッ！」

巧みな手管てくだによって、俺はいつもあつさり陥落した。イケメンさんの口から外することができず、見事に口内へ放ってしまった。

まだ酔いが残っているからか、勢いよく吐精したからなのか、体に力が入らない。口から吐き出させないと、と思うのに、体は言うことを聞いてくれない。

強い倦怠感けんたいかんに引きずられるように俺の意識はまた落ちた。

「ん……」

ふと意識が浮上する。まぶたに当たる光が眩まぶしい。朝が来たのだ。

起きるとその光が訴えるも、眠気が強くてその気になれない。光が顔に当たらないよう、ごろりと反対に寝返りを打つと、こつとなにかに当たった。それはとても温かくて気持ちがいい。その温かさにすり寄るようにぎゅっと抱きついた。

流星だ。最近は一緒に寝ることもなくなっただけ、今日は珍しく俺のベッドに入り込んだようだ。久しぶりだったから嬉しくて、俺は甘えるように頬をすりつけた。

やっぱり俺のことが好きなんだな。可愛い女の子と浮気をしていたって、やっぱり俺が――

「つてそうだよ！ こいつは浮気野郎じゃないか！」

浮気された事実を思い出した途端、俺の怒りはあつという間に頂点へと辿り着いた。さっきまでの強い眠気が嘘のようにガバツと体を起こし、隣を睨みつける。だがそこにいたのは流星じゃなかった。

「……は？」

え、誰？　なんで俺のベッドにイケメン外国人が寝てんの？

意味がわからず呆然とその顔を眺めていた。寝ていても本当に格好いい。

寝癖で乱れた金髪と同じ色の長いまつ毛。すつと通った鼻筋に薄い唇。少し彫りの深い顔立ちは、目をつむっていてもイケメンっぷりを堂々と主張していた。

しばらく眺めていると、イケメン外国人の眉間にぐつと皺が寄り、ゆっくりとまぶたが上がっていった。見えた瞳は綺麗な空色。その切れ長の瞳は、俺の姿をしつかりととらえた。

「……ハルト、起きていたのか？」

「うえっ!?　なんで俺の名前知ってんの!?」

「……寝ぼけてるのか？」

ふわあつと軽くあくびをしたイケメンさんは、のそりとその身を起こす。その鍛えられた逞しく美しい上裸が目の前に晒された。

「え!?　なんで裸!?」

「……そういうお前も裸だろうが。まさか覚えてないのか？」

「え!? げっ!? ほんとだ!? なんで俺裸なの!? え!? まさか、そういうこと!?」

知らない男と、ベッドの上で、裸で朝を迎えている。

この状況は間違いない、昨日このイケメンさんとやらかしたということだ。だが俺にその記憶はない。っていうか俺って昨日どうしたんだっけ? なんでこの人と一緒に裸になるようなことを?

やばい……全然思い出せない……どうしよう……

「えっとお……あなた、誰ですか? っていうか日本語がお上手ですねえ、あ、あはは……」

「……本当に覚えていないんだな」

恥を忍んで名前を聞いてみるも、呆れたようにため息を吐かれてしまった。イケメンさんは頭をガシガシかくと「あれだけ酒臭かったら仕方ないか」と呟いた。

酒臭かった、の一言で、昨日ヤケ酒で大量のビールやチューハイを飲んだことを思い出した。たぶんだけど、かなり酔っ払った俺はこのイケメンさんに絡んでしまったのだと思われる……その記憶が一切ないけど!

「俺はユリウス。魔法騎士だ」

「……ん? んん?」

ユリウス、というのは名前だろう。それはなんとなくわかった。だけどその次の言葉が理解できない。『魔法騎士』……? なにそのファンタジー用語。

……まさかオタク? 『封印されし俺の右手が疼くっ……!』的なことを素でやっているという

こと？

「それと昨日も言ったが俺は『ニホンゴ』なぞしゃべっていない。お前と同じシュルドル語を話しているんだ」

「……ん？ んんん？」

シュ、シュルドル語……ってなに？ それもあなたのファンタジー設定のお話ですか？

やばい……言葉はわかるのになにを言っているのか全然わからない……俺、このイケメンなオタクとどうやってコミュニケーションとったらいんだろう……設定に合わせてノッてあげなければならぬのだろうか。

「ハルト、お前は異世界からの来訪者だ。俺も信じられないがおそらく『聖女』の再来だろう。ヴォルテルに話して、一度調べなければならぬ。王宮へ行つて——」

「ちよつと待つて!? いろいろ待つて!?」

は？ なになになになに？ 俺が異世界からの来訪者？ 聖女？ さつきからあり得ない量のファンタジー設定盛り込んでるんだけどどうしたらいいわけ!?

「漫画やアニメも見てた時期があったからファンタジーなことはわかるけど、いきなりそれにノッてあげられるほど上級者じゃないからね!？」

昨今の外国人は日本の漫画やアニメの影響を受けて、ものすごいオタクの人もいるって知ってるけど、日本人だからって同じ熱量をぶつけられても困るんだって！ 日本人が全員アニメオタクだと思ふなよ！

「俺はあんたほど漫画もアニメも詳しくないんだ。そういう設定で話したいっていう気持ちはわかるけど、俺には難易度が高すぎる。だから申し訳ないけどその設定、今は置いて、どうしてこうなったのか状況を教えてほしい。覚えてない俺が一番悪いのはわかるけど、お願いします」

俺が頭を下げてそう言えば、イケメンさん改め、ユリウスさんは少し呆然とした表情をした。日本人なら誰でもノッてくれると期待していたんだろう。その期待を裏切ってしまったて申し訳ない気持ちでいっぱいだが、俺にはどうしようもない。

「設定、とはなんだ？ 俺は事実しか話していないぞ」

「え、まだやるのそれ」

「だから俺は本当のことしか話していない。ここはアングレット王国の王都シャトロワ。お前がいた場所じゃない。嘘だと思えば窓から外を見てみろ。お前の知らない場所のはずだ」

そんなまさか。そう思うもユリウスさんの表情は真剣で、嘘や冗談を言っているようには見えない。俺は飛び跳ねるようにベッドから下り、窓枠にしがみついた。そこから見える景色に俺は絶句する。

「……なにこれ。どこだよここ!？」

窓からの景色は、どう見ても日本の景色ではなかった。行ったことはないが強いと言うならヨーロッパの街並みに近い。どこかのアミューズメントパークかと思ったが、その景色はずっとずっと遠くまで続いていた。

そして出歩いている人の服装はどれもこれも現代日本では見ない服装。赤や青などの派手な髪色の人までちらほら見える。中には剣や弓を持っている人もいた。

それを眺めていると、ふっといきなり影が差し暗くなった。これから雨が降るのだろうかと思を
見上げると、なんとそこには空飛ぶトカゲらしきものが見えた。飛行機や戦闘機、ヘリコプターな
んかじゃない。コウモリのような羽を広げ、しかもそれがバサバサッと動くのを見てしまった。

「はああああ!? なにあれ!? なにが飛んでるの!?」

「あれはドラゴンだな。珍しい。王都に姿を見せるのは随分と久しぶりだ。よかったな。ドラゴン
を見るといいことがあるらしいぞ」

ユリウスさんも俺の隣で同じように外を覗きながら、事もなげに言う。

「ド、ド、ド、ドラゴンンンンン!? マジで言ってるの!? ねえそれ本気で言ってるの!? あれつ
て本物の!?」

俺はユリウスさんの肩を掴み勢いよく捲^まき立てた。至近距離で大声出したからか、ユリウスさん
の眉間にくつきりと皺が表れる。

「本物のドラゴンに決まってるだろ。どうやらその反応だとお前の世界にはいなかったようだな。
だがこれが現実だ。ドラゴンは実際に空を飛んでいる」

「……嘘だろ」

ドラゴン（らしきもの）はすいーっと上空を一周すると、そのまま優雅に遠くへと飛び去って
いった。

俺は自分の頬を思いつきりつねつてみた。かなり痛い思いをした。痛いと感じるということは夢
じゃない。ということは本当に真正正銘、ここは俺がいた日本でも地球でもなく、全然全く知らな

い別の世界だということだ。

「嘘だろ……」

なんで……一体なにがきっかけで異世界なんかに来てしまったんだ。こんな非現実的なことが自分に起こるなんて。そんな馬鹿な……

「俺……元の世界に帰れるの？」

「……おそらくその可能性は低いだろう。こちらに来る方法もわからなければ、別の世界に行く方法もわからないからな」

「そんなっ……」

元の世界に帰れないだと……？　じゃあ俺は全く知らないこの世界で一人で生きていかなきゃいけないってこと……？

流星には浮気され、どん底だと思っていたのに、まだこんな仕打ちを受けなければいけないなんてっ……

俺が絶望に打ちひしがれていると、ユリウスさんは俺の側そばから離れた。隣から感じるほんのりとした温かさがなくなった途端、なぜか急に寂しさがこみ上げた。

そんな俺の頭にばさりとなにかが降ってくる。

「なっ……シャツ？」

「とりあえず服を着ろ」

「あっ……!!」

そうだった！ 俺にも身に着けていないんだった！ ユリウスさんが投げてよこしたのは大きめのシャツ。どうやらユリウスさんのものを貸してくれるようだ。

俺の脱ぎ散らかしたスーツはベッドの下に転がっていて、見るからにしわくちゃになっていた。ありがたくシャツに袖を通すと、丈が長く股間部分まで隠れてしまった。まるで短めのワンピースみたいだ。

ユリウスさんは俺の頭一つ分は背が高いから仕方ないのだが。俺も百七十五センチはあるからそこまで低くないのに。

ユリウスさんもさつと服を着てベッドに座った。この部屋は寝室のようで、そこしか座るところがないのだ。俺もそれにならない、股間部分が見えないよう気を付けてベッドに上がり、布団を腰までかけた。

「とりあえず、俺の言ったことが本当だとわかったか？」

「はい。まだ信じられない気持ちでいっぱいですが、異世界に来たということだけはわかりました。それで、あの……」

「とりあえず昨日のことを話そう」

ユリウスさんは、昨夜のことを話してくれたのだが――

「――誠に申し訳ございませんでしたッ！」

うわああああ！ 俺のバカバカバカバカ！ 一体なにやってんだよ昨日の俺！ 恥ずかしくて

穴があつたら入りたい……！

泥酔していたとはいえ、見ず知らずの初対面の人に「俺のこと抱いてくれない？」なんて言つてキスするとか最低にもほどがある！

これじゃあ浮気していた流星のことをなにも言えないじゃないか！ おぼろげながらも『浮気されたし仕返してやれ！』つて思ったことを思い出したけども！ やつていいことと悪いことがあるだろ俺えっ！

挙句にそのことを一切合切覚えてなくて「あんた誰？」とか言つちやつたなんて……お前が誰だよつて話だよ！ あー！ 今まで酔っ払つてもこんな失敗したことなかったのに、異世界初日が朝チュン事件とか洒落にならんで！

今できることといえば精一杯の土下座のみ……

「まあ昨日はかなり驚いたが、おかげで俺は救われたんだ。だからそこまで気に病む必要はない」「……え？ 救われた？」

「一昨日、仕事で魔物討伐に行ったんだが、そこでヘマをしてな」

なんとこの世界は魔法があり、ユリウスさんは『魔法騎士』という魔法と剣などの武器を使って戦う職に就いているそうだ。

いつものように魔物を討伐しに出かけたが、変異種^{へんいしゆ}？ という、いつもと違う魔物に遭遇。強さも耐久力も桁違いでかなり手こずったものの、なんとか討伐に成功した。

だが最後の悪あがきなのか、変異種の魔物に右胸から左足まで斜めにざっくりと傷をつけられた

そうだ。

「しかも強力な呪いまで付与されていて、そのせいで回復薬がほぼ効かなかった。解呪しなければ治療できなかったが、呪いが強すぎて為す術がなかった」

様々な手段を試してみたがどれもこれも効果はなし。傷が治らないまま帰宅することにしたユリウスさんは、その帰り道で路地で寝転んでいた俺を発見したのだという。

職業上放っておくわけにもいかず声をかけたところ、俺が頓珍漢なことを言ってキスをしてきた。するとユリウスさんが負っていた傷の痛みがほんの少し和らいだそう。

「まさかと思ったが、もう一度お前と口付けをし、舌を絡ませるとさらに痛みが引いた。そこで気付いたんだ。伝説の『聖女』と同じ力を持っていると」

今から約五百年ほど昔、俺と同じように異世界からの来訪者がいたらしい。その人は浄化や治癒の魔法を使い、とある国の王様の深い傷と呪いをその力で救ったそう。今もおとぎ話の一つとして残っていて、とても有名な話とのこと。

浄化や治癒といった力は異世界からの来訪者のみが持つ特別な力なのだという。そのため、その来訪者は神が遣わせた高貴な存在である『聖女』として崇められることになったらしい。

ユリウスさんは王宮の筆頭魔術師ですら解けなかった呪いが和らいだことで、俺が『聖女』と同じ力を持っている、異世界からの来訪者だと確信したそう。

ちなみに日本人によくある黒い髪と目の色は、この世界には存在しない色なのだという。それも確信した要因の一つだったそう。

保護のために家へ連れ帰った俺の唾液をディープなキスで摂取したところ、呪いや痛みは軽減された。完全な解呪のためには濃い体液を摂取した方が早いと思ったユリウスさんは、つまり……その、俺にフェラをして直接精液を飲んだと言うのだ。

「唾液や血液、精液などの体液には魔力が多く含まれている。眠ってしまったお前に魔法を使わせるより、俺が直接摂取した方が早いと判断した」

すると誰も解呪できなかった呪いが解け、傷痕ひとつ残さずきれいさっぱり消え去ったそうだ。

……そういえばなんとなーくだけど、とてもとても気持ちよかった覚えがある。あれはユリウスさんにフェラされていたからなんだ……マジかあ……

そんなことされても起きるところか再び寝落ち、そして一連の記憶がない俺。ヤバすぎだろ……一つだけよかったことは、最後までヤッてなかったことだろう。

「俺は別にいつ死んでもよかったんだが、助かったということはまだ死ぬ時ではないということだ。ハルトには感謝している」

「……それならいいんですけど」

『いつ死んでもいい』という言葉に引っかけかりを覚えるものの、ユリウスさんの表情には清々^{すがすが}しさが表れているし、大怪我も呪いも治ったのなら本当によかった。

ただ俺は、いきなり身一つで異世界に来て、しかも帰れない。

言葉が通じるのは救いだだが、こんななにもわからない異世界に放り出されて俺はこれからどうすれば……

っていうか『聖女』の再来とは……

——まさか。

「あの……もしかして、俺って魔王退治とか行かなきゃいけないんでしょうか？」

「魔王……？　なんだそれは。この世界にそんなものはいないぞ」

「よかった……」

漫画やアニメによくある魔王退治とかしなくていいんだ。俺は普通の社会人だし、戦えなんて言われても無理だし。とはいえ……

「俺ってこれからどうすればいいんでしょうか」

「さあな。それもヴォルテルに話してから決まるだろう」

「その、ヴォルテルさん、ってどなたです？」

「この国の王太子だ」

「おうたいし……」

おうたいしってなんだろう……聞き慣れない言葉ですぐにピンとこない。おうたいし、おうたいし……ってまさか『王太子』!?

「なんだ？　お前の世界に王太子はいないのか？」

「いやつ、いないってことはないんですけど、あまり聞きなじみがなかったの……そっか、王子様に会わなきゃいけないんだ……」

いやいやいや、一般市民だった俺にハードル高すぎだろ!?　一国の王子様どころか、会社の社

長にだって会ったことないっての！ いきなり国のトップに近い人に会わなきゃいけないなんて……！ 想像しただけで胃がキリキリする……

「そこまで緊張する必要はない。あいつはそんな堅苦しい人間じゃないし、異世界からの来訪者であるお前をぞんざいに扱うこともないはずだ」

「……そう、ですか」

「とりあえずしばらくはこの家にいればいい」

「え……？ いいんですか!? でもご迷惑じゃつ……」

「一人暮らしだから気にするな。それに異世界からの来訪者であるお前を放り出すわけにもいかない。この先のことが決まるまでここにいればいい。その方が俺も安心だ」

「あ、ありがとうございます！」

よ、よかったあ……とりあえずいきなり放り出されて路頭に迷うことはなさそうだ。それだけで気持ち随分と楽になる。

やばい人に拾われていたら、今頃売られたり薬漬けにされたり、最悪殺されていてもおかしくない。運がいいんだか悪いんだかわからないが、とにかく拾ってくれたのがユリウスさんで本当によかった……

それからユリウスさんはズボンも貸してくれた。俺のサイズに合った服をこれから買いに行ってくれるそうだ。なにからなにまで本当に申し訳ない。ちゃんと稼げるようになったら返済しよう。

「じゃあとりあえず家の中を案内しよう。……だが、驚かないでくれ」

「へ？」

ユリウスさんの言葉がよくわからないまま、寝室から出る。どうやら寝室は二階だったようだ。階段を下りて一階に辿り着くと、信じられない光景が広がっていた。

「ゴ、ゴミ屋敷……」

そこにはなんとゴミの山が。一階部分の床という床がゴミで埋め尽くされ、足の踏み場もない状態だった。

テレビで何回か見たことのあるゴミ屋敷を彷彿とさせるユリウスさんの家。まさかの展開すぎる。

「だから驚かないでくれと言った……」

「いやいやいや！ 驚くに決まってるでしょこんなの！」

ユリウスさんは超がつくほどのイケメンだ。この人が地球にいたら、間違いないスーパーモデルとかハリウッドスターになるに違いない。それくらいにキラキラしい見た目をしている。

なのに自宅はとんでもないゴミ屋敷。見た目のギャップがすぎて、なにかの間違いではと疑うほど。

よくこんな家に住めるな……あまりの惨状に俺の顔がピクピクとひくついている。

「家にはほとんど寝に帰るだけなのと、その、家事がとてつもなく苦手で……」

いや苦手という範疇はんちゆうを超えてるでしょ、これ。家事が得意じゃなくてもゴミは捨てなさいよ……この家のまともな部分は二階の寝室だけ。一階は正直言って息を吸いたくもないし、こんな家に住みたくない！

「ユリウスさん！ 俺がこの家、徹底的に掃除します！」

「そ、掃除？」

「しばらくお世話になるのにこんな家に住むのは無理なので！」

逆にこんな惨状の家に「しばらくいてもいい」なんてよく言えたな……いや、今の俺にとってありがたいことこの上ないのだけど。

「ハルトは家事が得意なのか？」

「得意というほどではないですが、前の世界では普通に家事をしていたので料理や洗濯含め、一通り問題なくできます」

「本当か!? なら頼む！」

おおう……めっちゃ嬉しそうだな。食い気味で了承してくれたぞ。

これならユリウスさんに拾ってもらった恩をお返しする手段としてもちよいといい。

まあ、ユリウスさん自身もこの家がやばいことはわかっているみたいだ。だけど家事が苦手でどうすればいいのかわからなかったんだろう。

幸か不幸か、流星との同棲で家事ができるようになってしまった。複雑だが、今はよかったと思うことにする。

ユリウスさんはゴミを捨てるための大きな麻袋あきふくろをいくつも持つてくると（家にあつたのになぜ使わなかった？）、王宮へ俺のことを報告しに出かけて行った。ついでに俺の服を買ってきてくれるらしい。

その間に俺はこの家の大掃除だ。

どこから手を付けるか悩ましいところだが、とりあえずキッチンから始めることにした。

綺麗な手ぬぐいも用意してもらったので、口に当てて頭の後ろで結んだ。これで簡易的なマスクの出来上がりだ。埃も溜^{ほり}まつているし、マスクなしで掃除はさすがに無理すぎる。

まずは換気をしないと、とゴミを踏みつけながら窓に近付き、大きく開け放つ。途端にぼわっと溜^たまった埃が舞い上がる。それを見た瞬間、俺の中のかがブチ切れた。

「絶っ対！ 綺麗にしてやるからな！」

より一層の気合が入り、ゴミを勢いよく掴んだ。

やるぞ！ 打倒ゴミ屋敷！

無心でひたすらゴミを集める作業に没頭すること数時間。

「ふふふふ……」

ゴミでパンパンになったたくさんの麻袋を見て、思わず気持ち悪い笑いが出た。ゴミを集める作業はとても大変だったが、埋めつくされていたゴミが全てなくなった達成感が湧き上がる。

床がちゃんと見えて、歩くことに支障がない。なんて素晴らしいのか。気持ち悪い笑いが出るのも当然だ。

だが一点不思議なことがあった。キッチンに流し台はあるのに蛇口^{じょうぐち}が見当たらなかったのだ。まさか不良品……？

水が出せなければ喉を潤すこともできない。俺はいい加減喉が渴いたぞ。どうすればいいんだ……
「すごいな、もうここまでやったのか」

「あ、おかえりなさい」

途方に暮れていると、荷物を抱えたユリウスさんが帰宅した。床が見えていることに驚いている。その様子に俺も鼻高々だ。

だが次の爆弾発言に、得意気だった俺の気持ちは吹き飛んだ。

「ハルト、今日の夜に王宮へ向かうことになった。ヴォルテルが会うそうだ」

「……はあ!? ちょ、ちよつと待ってください! 今日之夜って急すぎませんか!」

いきなりそんなこと言われても心の準備なんてできませんけど!? 大体そんな簡単に王子様に会えるものなの!? 普段なにをやっているかなんて全然わからないけど暇なわけがないよね!?

「聖女の再来だからな。緊急案件だそうだ」

ユリウスさんが王子様に報告した際、本当に聖女の再来であれば超重要人物となるため即確認が必要となったそうだ。

急遽夜^{きんぐや}の仕事を變更し、迎えをよこしてくれることになったのだとか。

「う、嘘でしょおおおお……」

俺はあまりの急展開に頭を抱えた。異世界に来てからこつち、驚きすぎてキャパオーバーなんです。が。

「急なことは認めるが、これでハルトの身の振り方が決まるはずだ。そっちの方が安心だろう?」

「……それはそうなんですけど」

心の準備ができないんですよ！ だつて会うのは王子様でしょ!? しかも次期王様でしょ!?

「つて、あー！ このままじゃまずい！ お風呂呂！ お風呂呂入らなきゃ！」

さっきまでゴミを集めまくっていた俺は全身埃まみれのはずだ。こんな状態で王子様に会えるわけがない。やばい。すぐに風呂掃除をしなければ。

「それは大丈夫だろう。ものすごく綺麗になつてるぞ」

「へ？」

そんな馬鹿な。ゴミを集めていた時だつて埃が舞っていたんだ。服にも大量の埃がついて……いないな？ あれ？

自分の体を見下ろしても汚れがない。髪を触つてみるとまるで洗い立てのようにサラサラ。おかしい。あれだけの埃が舞っている中で作業していたんだぞ。汚れがないなんてことはないはずだ。

「……おそらくだが、汗をかいたんじゃないのか？ 汗も体液だ。浄化の力で綺麗になつたんだろう」

「……マジですか」

え、俺すくくない？ 汗をかいたら汚れるどころか綺麗になるなんてすくくない？

とはいえ、今まで入浴の習慣もあつたし、日本人としてそこは譲れないためこれからもお風呂呂に入るけど。

そんな時、グーッと、俺の腹の虫が鳴った。

「すみません……お腹が空いて、喉も渴きました……」

「もう昼時だったな。気が回らなくてすまない。すぐに外で買ってくる」

ユリウスさんは手に持っていた荷物を二階へ置くなり、また外に出て行った。近くに屋台があるらしく、すぐに戻ってくる。

椅子を二脚持ってきてほしいと言われ、素直に椅子を持ってユリウスさんの後をついていくと、裏口を出た先にあるこぢんまりとした庭に着いた。一切手入れをされていないため、草が生え放題だったけど。

「ここで食べよう」

椅子を持ってきたのはこのためだったのか。少し汚れてはいるけど地面に座るよりはマシか。

「手を出してくれ」

そう言われて素直に両手を出すと、突然ユリウスさんの手から水が流れてきた。びっくりして思わず手を引っ込めてしまう。

「え!? ええ!」

「どうした? この水で手を洗ってくれ」

「いや、え? まさか、魔法……?」

「……ハルトの世界には魔法がなかったのか?」

「はい……すごい、本当に魔法なんだ……」

信じられない。いきなりユリウスさんの手からじよばぽつと水が流れてきて、これが魔法なんだと初めて知る。

恐る恐る手を出すと、ユリウスさんはまた水を出してくれて、それで手を洗う。冷たくて気持ちがいい。

「キッチンに蛇口がなくてどうやって水を出すのか謎だったんですが、この世界じゃ魔法で水を出してるってことですか？」

「そうだ。これは生活魔法の一種で、この世界では誰でも使える」

なんと。そういうことなら水を出す場所がなくても困らないはずだ。さすが異世界。ファンタジーすぎる……

「魔法ってどうやって使うんですか？」

「体内の魔力を練^ねって使うんだ」

ユリウスさんにそう教わってうんうん唸^{うな}ること数秒。

「そもそも魔力ってなに？ 全然わからない……」

魔法なんて想像上の存在だった俺に、いきなり魔法と言われても理解が追い付かない。諦めてご飯を食べることにした。

パンにお肉が挟まったサンドイッチらしきものと、木のコップに入った飲み物を受け取る。果物を絞ったジュースらしく、甘い匂いがする。木のコップは大きくかなり量がある。起きてからなにも口にしていなかったから、たくさん飲めるのはありがたい。

いただきます、と心の中で唱え、ぱくりとかじりつくと、濃い味付けのホロホロのお肉がパンに合って美味しい。初めて食べる味だが夢中になつて食べた。

パンのサイズがかなり大きくて、ジュースも飲んでいるから一個でお腹がいっぱいになってしまった。「かなり少食なんだな」って言われたけど、ユリウスさんみたいに鍛えてるわけでも体も動かす仕事をしていたわけでもないし、標準だと思う。

そんなユリウスさんは、その大きなパンを四つ軽々と食べきっていた。すごい。

お腹もいっぱいになったところで、掃除の続きに取りかかる。

二人で一緒にゴミでパンパンになった麻袋を捨てれば、家の中はスッキリ広くなった。これから掃除の本番だ。

風呂場に置いてあった桶に水を入れてもらい、水拭きを始めようと思ったがここで疑問が生まれた。この世界に洗剤は存在するのだろうか。

「よくわからん」

ユリウスさんからはなんとも素っ気ない返答。まあ家事が苦手だと言ってたし、よくわからないのも当然か。だけど水拭きだけじゃ綺麗にはできない――

「あ。俺の体液に浄化の力があるんですよね？」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「ナイフを貸してもらえますか？」

よくわかっていないユリウスさんからナイフを借りると、自分の指にぷすりと刺して血を数滴、水の中に入れてみた。

「ハルト!? なにをやっている!？」

いきなり自傷行為をしたからか、ユリウスさんは慌てて俺からナイフを取り上げた。体液ならなんでもいいんだろけど、さすがに自分の唾液で掃除するのは気分的に嫌だ。

「浄化機能があるなら、血を混ぜた水で掃除をすると綺麗になるんじゃないかと思って。ちょっと実験してみます」

「だからって傷をつけるなんて……！ はあ……とりあえず怪我の治療を……って治ってるな」

「あ、本当だ」

治療の力なんだろう。ナイフで傷をつけた場所はあつという間に塞がり、綺麗に傷がなくなっていた。痛みももちろん全くない。俺の体、本当にすごいな。

「本当にその水を使つて掃除するのか？ いくらなんでも贅沢すぎるぞ……」

ユリウスさんがなにか言っているが無視だ無視。これは俺の血だし俺にとつては贅沢なものもない。

ユリウスさんに雑巾として使える布を貰い、血液を垂らした『浄化水』につけて絞る。それで床を拭いてみると、なんとということでしょう。拭いた場所が、一瞬でぴかぴかな床になったではありませんか。

しかも力をほとんど入れなくても、軽く拭いただけで簡単に綺麗になる。

俺の体液、すごくない？

「……すごいな」

「なにこれ楽しい！」

面白いほど汚れが取れるため俺は夢中になった。あつという間に風呂場全体をぴっかぴかに磨き上げ、まるで新品のような仕上がりに。

そのままキッチンやリビング、廊下にトイレと次々に拭き掃除を行った。ユリウスさんにも手伝ってもらったから、あつという間に掃除が終了。

キッチンには調理道具や食器類もあったが、見事に埃が被^{かぶ}っていた。それらも俺の浄化水に潜^{くぐ}ればぴっかぴかだ。

ゴミ屋敷だった家は、その面影^{おもかげ}を残すことなく美しく変貌した。窓から入る風も気持ちよく、よどんでいた空気も今は爽やかそのものだ。

「すごい……この家を買った時の状態に戻った」

「これで気持ちよく過ごせますね」

「本当に感謝する」

ふわりとした優しい微笑^{ほえ}みを見せられて、俺の心臓はドキリと跳ねる。顔がいいと笑顔の破壊力もすさまじいっ……！！

でもそれだけじゃない。心臓がトクトク鳴っているのは、ユリウスさんの言葉が嬉しかったからだ。俺が家事をすることが当たり前で、流星から礼を言われることはほとんどなかった。でもユリウスさんは苦手ながらも手伝ってくれて、嬉しそうにお礼を口にしてくれた。

そのことが心が震えるほどに嬉しい。

ものすごく些細^{ささい}なことだけど、言われた側の心にこんなにも響く。自分がやったことで、喜んで

もらえたことが嬉しいのだ。

「どういたしまして」

またその笑顔を見たいと思うほど、大きな達成感に包まれた。

あともう少しで王宮から迎えが来るだろうとのことで、俺は着替えることにした。ユリウスさんの服は明らかにサイズが合っていないし、王子様に会うのにノーパンはよくない。

ユリウスさんが買ってきてくれた服は、異世界ならではのデザインだが、着方は日本の服と同じようだ。この世界にゴムはないのか、下着はひもで縛るタイプで、形はブリーフだった。Tバックとかひもパンじゃなくてよかった……

着替え終えたところで王宮から迎えが来た。これから王子様に会うと思うと、緊張感が高まってくる。

「ハルト、これを。この世界にハルトのような黒い目や髪色の者はいない。かなり目立つだろうからこれで隠しておいてくれ」

ユリウスさんに渡されたのはフード付きのローブだった。そういうことなら、ありがたく使わせてもらうことにしよう。

2・聖人の認定と家政夫の始まり

外へ出ると、まるで映画に出てくるような馬車が付けられていた。馬が一頭繫がれており、車室部分は割と小さめ。装飾はほとんどないシンプルなものだった。

ユリウスさんが先に乗り、俺に手を差し出してくれた。その手を取り中に入ると、ふかふかなシートがお目見えした。お尻を優しく受け止めてくれ、座り心地は抜群にいい。

ユリウスさんが馬車の屋根を棒でコンコンと叩くとゆつくりと走り出した。

「すまないな」

「すまないって、なにがです？」

「この馬車が、聖女の再来だと思われるハルトに相応しくないことだ」

「ん？ どういうことですか？」

本来であれば、『聖女の再来』という超重要人物を乗せるには、豪華な馬車を使って然るべきらしい。でも今日迎えにきてくれたこの馬車は、王族がお忍びで使うもので、わざと目立たないように作られている。

豪華な馬車に乗った客人が王宮に入った、という目撃情報はあつという間に広がるそうだ。余計

な混乱を避けるために、あえてこの馬車を使ったとのこと。

俺にとってはその配慮がとてもありがたかった。知らないうちに目立っているなんて遠慮させていただきたい。俺は小心者の一般市民なんで。

「あ、だから椅子の部分はふかふかなんですわね」

馬車自体シンプルなのに、座り心地がとてみいいのはそういうことなのか。見た目が地味でも乗るのは王族。座り心地くらいはよくしないとだよね。

「まさか、ハルトの世界には馬車がなかったのか？」

「国によってはありました。俺が住んでいた国で馬車なんて、アミューズメントパークくらいじゃないでしょうか。車はありましたけど、馬が引くんじゃなくて機械なんですよ」

「……すまない。わからない言葉が多くてよく理解できなかった」

「あ、そっか」

アミューズメントパークとか、こっちの世界にはない言葉だよな。遊園地、もこの世界にはあるんだろうか。

「俺がいた世界も、ずっと昔は馬車や剣を持った人がいたんです。でも今はいろいろ発展して、機械でなんでもできる世界になりました」

自動車に飛行機、パソコンやインターネットについて言葉を碎きながら説明した。だがユリウスさんはなかなか想像できなかったようで、首を傾げられてしまう。そう思うと俺がいた世界ってかなり文明が進化した世界なんだな。その代わり、魔法なんてものはなかったけど。

そんな話をしてるうちに、どうやら馬車は王宮へと着いたようだ。馬車が停まり扉が開けられ、ユリウスさんが先に降りた。また差し出された手を握り、タラップを慎重に下りる。地面に足を着けて前を見れば、映画や世界遺産のような宮殿が目の前にそびえ立っていた。

「……お城」

「ん？ それはそうだろう。王宮だからな」

うん、そうなんだけどそうじゃないだよユリウスさん。

こんなお城、日本じゃアミューズメントパークでしか見られないし、しかもそれは偽物だ。今日の前にあるのは本物の城。王様や王子様が住んでいるお城だ。

「ここは側門だ。こちらからヴォルテルの執務室に向かう」

「え!? 正門じゃないの!？」

お城には正門以外にたくさんのお入り口があるとのこと。正門は、他国の王族の訪問や、王族の方々の公的な外出の時に使うらしい。

いわゆる『王宮の顔』となる部分だから、権威や威厳を示すために広さも装飾の煌びやかさも圧倒されるほどらしい。

逆に側門は非公式の出入り口となるそうで、正門ほど派手には造られていない。それでも庶民代表の俺からすれば、十分圧倒されてるんだけど。

あほ面を晒け出した俺にユリウスさんがくすりと笑う。

「正門を見たら卒倒しそうだな」

「……卒倒する自信がありませんよ」

本物のお城すごい。そんなところに来ちゃった自分が怖い。

ユリウスさんが警備の騎士さん？ と軽く言葉を交わすと中へ誘導された。そのままユリウスさんの後をついていき、いくつかの回廊^{かいろう}や廊下を通り抜ける。

王宮の中は白い石造りで、とても上品だった。床は大理石だろうか。光沢のある床が美しくて歩くたびにコツコツと音が鳴る。派手な装飾はないのに、自然と背筋が伸びるような感じがした。

「ハルト？」

「あ、すみません！」

物珍しくてきよろきよろと見回していたら遅くなっていたようだ。ユリウスさんに「また今度じっくり案内してやる」と言われ、手を引かれてしまう。まるで子どもだ。

だって仕方ないじゃないか。お城なんて前の世界じゃ無縁だったんだから。ふわふわしてしまう俺は悪くない。

どこをどう歩いてきたのかわからなくなった頃、ユリウスさんの足が止まった。扉の前にはまた警備の騎士さんがいて、ユリウスさんの顔を見て頷くと俺たちが到着したことを室内に告げてくれた。

中から入室の許可が出て騎士さんが扉を開けてくれる。ユリウスさんに手を引かれてそのまま中へ入れば、ユリウスさんに負けず劣らずなイケメンさんがにこりと笑って出迎えてくれた。

「ご足労いただき感謝いたします、異世界からの来訪者殿。私はアングレット王国王太子、ヴォル

テル・アングレットと申します」

この人が正真正銘^{しやうしんしやうめい}、本物の王子様なのか！ ヴォルテル様は、ツヤツヤのピンクブロンドの髪に鮮やかなオレンジ色の瞳の美青年だった。

王子様って高飛車なイメージを勝手に持っていたけど、ヴォルテル様は上品で物腰も柔らかい。優しいそんな人でほっとした。

「は、初めまして！ 菅野晴翔です……つてこつちじゃハルト・スガノになりますね。よろしくお願いします」

被っていたフードを下ろしお辞儀をすると、俺の黒髪を見たヴォルテル様は目を見開いた。

「これはまた見事な漆黒^{しつこく}ですね……」

やっぱりこの色はものすごく珍しいようだ。黒髪が普通だった世界にいた俺からすれば、驚かれる方が違和感なのだけど。

「私の側近も紹介させてください」

「ルーカス・ガトーと申します。聖女様の再来だと聞いて疑っていましたが、その髪色を見ると異世界からの来訪者というのは本当のようですね。お会いできて光栄です」

ルーカスさんは綺麗な青い髪にキリっとした緑の瞳の持ち主だ。見た目からして非常に真面目で厳格そうな雰囲気がある。

側近はもう一人いるそうなのだが、今はヴォルテル様の代理として地方へ行っていて不在のと。側近の二人はヴォルテル様が直々に指名した優秀な人物だそうだ。

ヴォルテル様に促されてソファに腰かける。ルーカスさんがとてもいい香りのお茶を出してくれた。

「まずはユリウスの呪いと怪我を治してくれたことにお礼を。彼は魔法騎士団の中でも非常に貴重な戦力なのです。我が騎士団の大切な騎士を救ってくれたこと、心より感謝申し上げます」

「いえつ、俺もよくわからないままで……ただユリウスさんの怪我を治せてよかったです」

ユリウスさんって結構すごい騎士さんだったんだ。ちらりとユリウスさんをうかがい見ると、言われ慣れているのか表情一つ変えず、出されたお茶を飲んでいる。

「さて。本日来ていただいたのはあなたの能力を調べるためです」

ルーカスさんが四角い箱のようなものを俺に差し出した。これは『鑑定鏡』かんていきょうというらしく、大き

さはA4のコピー用紙ほどだ。真ん中に鏡、というか薄っぺらい水晶のようなものがはめられている。

その周りを囲むように、文字というか記号のようなものが描かれていて、昔アニメやゲームなんかで見た魔法陣のようだった。

真ん中の鏡のところに手を置いて魔力を流せば、その人の持つ魔力量や適性がわかるという。さすが異世界。ファンタジー。

では早速、と手を置いた方がいいが俺は首を傾げた。そんな俺を見てユリウスさんとヴォルテル様も首を傾げる。

「あのー……魔力ってどう流すんですか？」

「え？」

俺のいた世界に魔力なんて存在しない。流せと言われてもどうすればいいのか。ヴォルテル様たちにそのことを説明すると「魔力のない世界があるのか……」と逆に驚かれてしまった。

魔力がなにかまったくわからないので、俺の体液をこの鏡の部分に垂らすことになった。魔力は体液にも含まれているらしく、魔力の放出が難しい場合はこの方法をとるらしい。

ということ、またユリウスさんにナイフを借りて指先をちよびつと切ることにした。どうせすぐに治るし。

ただ俺が「じゃあ血液で」と言った時のみんなの顔は揃そろって渋じゅうめん面を作っていた。……そんな嫌そうな顔しないでよ。

まあいいやと、ぶすりとナイフの先端を指先に刺す。ぷっくりとした血が出てきたのでそれを鏡の部分に押し付けた。

すると不思議なことに、鏡の周りに描かれた魔法陣がぼわぼわと光りだした。その後ピカッ！と強い光を放つと、輝きは全て沈黙した。

「これは……」

鏡の部分を見込んだヴォルテル様が声を上げる。俺も覗き込んでみた。すると知らない文字のはずなのに不思議と意味が理解できた。言葉が通じると同じように、俺にもこの世界の文字がわかるみたいだ。

『浄化、治癒、解呪』と書かれていますね。やはり聖女様の再来で間違いないようです」

これで俺が持つている力も、おとぎ話で語られる聖女と同じだと確定された。

「解呪」はこの世界でもできる人はいるが、簡単なものに限られるそうだ。聖女の解呪は特別で、ユリウスさんが受けたような強い呪いは聖女にしか解けないらしい。

そして俺にとつてもものすごく残念なこともあった。

『魔力なし』……マジかあ……」

俺には魔力がないらしい。はつきりとその事実を突きつけられショックを受けてしまった。

だってせっかく魔法がある世界なのに魔力がないって、魔法が使えないってことだろう？ 聖女の力は体液だけの話だ。それがなければ俺はその辺にいる一般人と変わらない。

どうせなら俺だって魔法を使ってみたかった……

「魔法のない世界から来たハルトには魔力回路というものが存在しないのだろう」

以前の聖女は魔法を使って浄化や治癒を行っていたそうだが、魔法が使えない俺が聖女の力を使うなら、ユリウスさんの家を掃除した時のように体液を使うしかないようだ。

「は……？ ユリウスのあの家を掃除したですって!？」

ユリウスさんの家の話をしたら、ヴォルテル様が驚きの声を上げてしまった。どうやらユリウスさんの家の惨状を知っていたらしい。まさかの掃除。しかも俺の体液を使って。

「はあ……聖女様の能力をそんなことに使うなんて……」

ルーカスさんは大きなため息を吐くと頭を抱えてしまった。ヴォルテル様は絶句。

「誤解のないように言っておくが、俺は止めたからな」

「あ、そう！ そうなんです！ ユリウスさんは嫌がってたんですけど、俺が実験も兼ねてやった

んです！」

ユリウスさんに非難が集中するのはまずい。見ず知らずの怪しい俺を拾ってくれたお礼と、行く当てもない俺を保護してくれたお礼であること。俺は家事も一通りできるし、浄化の能力がすごすぎても楽しかったこと。だからユリウスさんに強制されたわけじゃないことも全部ちゃんと説明した。

「……今代こんだいの聖女様はなんとも好奇心旺盛な方のようにですね」

「あー……なんかすみません」

「ハルト様。あなたはやはり聖女様の再来で間違いありません。どうしてこちらへとお越しになったのか、どうやって世界を渡ってこられたのかはわかりませんが、あなたの身元や衣食住すべて国で保証させていただきます」

ハルト様。聖女と同じ能力を持っていると確認できたことで、俺は王子様から「様付け」されるようになってしまった。ただの一般人だった俺が、王子様からそう呼ばれると、ものすごく居心地が悪い。

「あの……様付けはやめていただけると助かります。俺はただの一般人でそういったことに慣れていなさすぎてちよつと……」

「ですがハルト様のお力は、この世界ではハルト様ただ一人しか持ち得ない希少なもの。先代の聖女様と同じ能力を持った方を、ぞんざいに扱うことはできません」

うへえ……どうしよう……